

〔 熟塾新春講座 〕

必死のパッチで生きてさえすれば、
倒れてもまた起きられる(「必死のパッチ」より)

ピンチをチャンスに！

オカンが語る“げんき堂”物語

講師：げんき堂代表取締役 **菊元政子**さん

日時：2009年1月30日(金) 午後7時～9時

会場：ドーンセンター・セミナー室

『いやぁ……アンタ久しぶり！元気そおやないかいなぁ！ごめんなぁ、遅おなってもて。私かてアンタのことずっと気にしてたんやで、ホンマ。』とは、落語家・桂雀々氏(48)の初の自叙伝「必死のパッチ」(幻冬舎、2008年10月発売@1,365円)の冒頭。11歳の時に蒸発し、2002年に29年ぶりに息子と再



会したオカン・菊元政子さん登場シーン。オカンが去りオトンも消えた家で一人ぼっちで暮らしながら、近所のやさしい人々や友達に囲まれ、やがて桂枝雀師匠と出会い落語家の道を切り開くまでの壮絶な中学生生活を描く感動作「必死のパッチ」をテキストに、その自叙伝では語られなかった29年間のオカンの物語を聴く新春講座。

一人息子を置いて家を飛び出した専業主婦のオカンは手に職をつけるべく梅田の雪岡学園(按摩・マッサージ・指圧・鍼灸学校)学校で学び必死で働き、体の癒し・心の癒しで元気になろう！「元氣になれば何でもできる」をスローガンにリラクゼーションルーム「げんき堂」を起業。

ピーク時には18店舗を数え、75歳の現在も(兵庫)西脇本店、イオン長田南店、播州憩いの里店、こんだ薬師温泉ぬくもりの郷店、HOTEL万葉岬店、(大阪)本町店、八尾グランドホテル店と8店舗を構える女性経営者として活躍している。

オカンとの出会い



熟塾の年間予算も計画もない、仕事の合間に縁から縁で結んでいく風来坊のような運営だが、眼には見えない羅針盤によって導かれているのではないかという時がある。今回の企画も、去年の9月10日の

誕生日に会社帰りに会の打ち合わせがあり集合時間までに20分ほど時間があるからと慢性肩こりの私が飛び込んだマッサージ店のカウンターに桂雀々師匠とのツーショットの女性の写真があった。「この方は？」との質問に店員さんは「雀々さんのお母さんで、このお店を運営されています。」との返事。

いつぞや深夜のテレビ番組で、雀々さんの人生を再現したドラマを見たことがあった。明るいキャラクターの雀々さんの少年時代はあまりに衝撃的だった。その番組の中で実際の結婚式で親代わりの挨拶に感極まって「雀々を宜しく」と泣きじゃくる故桂枝雀師匠の姿が特に印象に残った。

実は私は25年前に会社に入ってから、朝日放送の「浪華なんでも三枝と枝雀」という番組のコーラス隊の15名内の一人として半年にわたって主演。毎週土曜日に福島にあるABCホールに通い、枝雀師匠とお会いしていた。枝雀師匠のキャラクターを色濃く受け継いだ雀々師匠の落語が好きだった。最近は何れも増し角のとれた語り口にはどこか静かな哀愁も加わって人間の深い可笑しみも織り交ぜる表現力も感じる事があった。

「雀々さんの落語いいですよねぇ」と何気なく名刺を置いて帰ったら、数日後お店から電話あり、店員さんに代わってお母さんが電話口に出られ、話が聞きたいのでとお誘いいただいた。お店までは会社から歩いて5分。同じ帰り道だからと更に天王寺のお店で食事をしながら、お話を聞く機会を得た。テレビの再現ドラマでは母が続いて父が蒸発し一人ぼっちになり借金とりに身の上話に同情されての下りも「必死のパッチ」の通りで、中学卒業後枝雀師匠に弟子入りし落語家として名が出始めた頃、父親が名乗り出て、母が現れたで終わっていた。ドラマでは描かれていなかった蒸発した母はどうしていたのが気になっていたもので、初めてお会いした時「お母さんは再婚されたんですか？」と恐る恐るたずねると「結婚はこりこり、再婚なんかしてはいよ」ざっくばらんで、おおらかに笑うお母さんの話は興味深かった。

さらに、うちの子が近々自分の生い立ちについて本を出すんやけど、蒸発した母親としては出版は嬉しい半面、自分のことがどう描かれているか不安。まだ原稿も読んでないけど、お嫁さんはこの内容だと戸惑うし、息子本人からは、世間はまっこんなオカンがいるんやなぁと思うけどいるんなことがあるからすぐ忘れるやろから大丈夫やと言われる度になんか自分の事が鬼婆に書かれているのはと困惑な様子。しかし結局は母心、息子の視点で描かれるのなら、それもわが姿なのだからとわが子を思い、本が売れるようにと願うばかりだと聞かされた。

2008年10月、出版記念の落語会に行き本を手にした。本の内容もよく文章も読みやすく、更にやり手編集長の手腕もあってか、年を越すと販売数も三十万部を突破。桂雀々師匠著の「必死のパッチ」をテキストに本には書かれてはいない、生のオカンの声を聞く会を開いた。(原田彰子)

ピンチをチャンスに！ オカンが語る元気堂物語 (講義録)

夫のギャンブルで借金を背負い鍼灸師へ

開口一番「雀々の蒸発した母です」という挨拶。今も現役の社長として活躍。本業のマッサージや鍼灸については従業員を集めて講習を行うことがあるが、自分の人生を、特に母親の立場について語ることは初めてとの前置きから話が始まった。

姫路の田舎に生まれて大阪という都会で生活できることを夢見、紹介してくれる人もあったので同郷の男性と結婚。両親が用意してくれた田舎では当たり前の花嫁道具がほとんど入らないアパートの一室から始まった。嫁入り道具を大方持ち帰ることになった時、親戚の者が「なんや不吉やなあ...」というつぶやきが現実になった。

一人息子の長男も生まれ、時々は記念写真も撮りに



行く平凡な幸せな夫婦生活もつかの間、もともとギャンブルが好きだった夫が、パチンコやポートルースから、賭博に手をつけ始めると金額の桁数が跳ね上がった。多額の借金の金額に呆然としているうちに一千万円近い金額に膨れ上がっていた。

やがて取り立てにくる借金とりへの言い訳を考えるうちにノイロ

ーゼになり、ある日息子を学校へ送り出した後、すべてから逃げたくなり家を飛び出し、気がついたら実家に帰りついていた。

(写真：桂雀々師匠を膝に親子仲良く記念写真)

息子の著書の中で『子供の頃僕が知っているのは泣いている母の姿だ』というが、元夫にギャンブルをどうにか止めさせようと説得したが一向に耳を傾けず、それどころか実印を持ち出しては借金を増やすので家の中に必死に隠しておくのだが、いつも探し出しては私が制止するのを振り切って実印を持ち出すたびに借金を増やすばかりで、どうなるのだろうとシクシク泣いていた姿だった。

実家まで借金とりが追いかけてくるので親は娘の身を案じ離婚へ話がすすみ、その席上で夫は子供を取るから、借金を取ってくれという事になった。

とりあえず借金の債権者を全員集めて弟が私に代わって話をつけてくれた。当事者がその席上にいないほうがいいので、姫路駅前映画館でも見てこいということになり飛び込んだ映画館で上映していたのが「仁義なき戦い」だったが、家でどの戦いがどう決着したかの方が気になって呆然とスクリーンを眺めていた記憶ばかりが残っている。

その後は、実家で肩代わりしてもらったお金を返すと共に息子を取り返すために女一人で食べていくだけの職業を手につけなくてはと鍼灸師の免許をとった。離婚の話合いの席上子供を取るといった元夫が育ててくれるだろうと信じていたので、息子の著書の中でその後もギャンブル中毒から抜け出せず借金を増やし親子心中で息子まで殺そうとしていたとは知らなかったのが本当に驚いた。

29年目の対面までの息子と母の葛藤

本の中では29年振りに対面したと書いてあるが、自分が産んだ息子のことは忘れることはないので落語家として枝雀師匠に弟子入りしたと聞いたので、一ファンからとして楽屋見舞いとして金品を贈ってきたがその度にマネージャ経由で「持って帰ってくれ」と何度も断られたが、無理やり置いて帰った。そんな帰り道は、受け取ってくれなかったという暗い気持ちを引きづっていたし、小さな会場ではパタッと息子にあつたらどうしようと思う複雑な気持ちもあった。とは言え息子の姿を見たいので、初めは客席の後ろの方から見ていたが次第に真中あたりから、やがて前のほうで張り付いて見ていた。

息子も母親が客席で見てると意識があったので、「しまいにオカンが舞台上がってけえへんか心配してた」と話していた。

ある時、人づてに結婚したと聞いたので、お祝を送ったがその時もそのまま送り返された時にはとっても悲しかったが、置き去りにされた母親への息子の怒りは深く、理由はどうあれ子供を手放した母親への報いだと改めて痛感させられた。

そんな空しい高座通いが続いたが、とうとう自分でも息子の許しを得られないまま舞台を観るのも辛くなり、自分が産んだ分身がどこかで幸せに生きてくれていると思おうとこれが最後と自分に言い聞かせ西脇市のアピアホールに向かった。

舞台を見終わった後、事務所の人に母親だが面会したいと告げると長く待たされ、「お母さん一人でお越しください」と楽屋に導かれて29年目に対面となった。ちょうど楽屋にいたはったお世話になった枝雀師匠の奥さんへの気遣いもあったのか、「育ての親が一杯いてるし、ざこばさんの奥さんの妹さんと結婚して今は幸せにしてる。今頃、母親面して出てきて、なんやねん！」という言葉が浴びせられたのでもうこれが最後だと思っていたので「あんたは、木の股から生まれんたんやと違うよ。私が産んだんや！」と言いつつ顔色が変わった。

楽屋を出てエレベーター前で29年ぶりの対面に高揚して呆然として立っていると「何してんの。ボタン、押さんかいなあ...。」と言われ飛び乗ったが、扉が閉まる前に「苦しいこともあるやろけど、何でも言うておいでなあ。」という、小さな時にみたちょっとはにかんだ嬉しそうな表情を浮かべたように私には見えた...

必死のPATCHで生きた母と子はやっぱり親子

小さな時は「朝から晩まで貢一やねえ」と近所の人に言われるほど可愛がってきた自分の息子が大きくなり、29年ぶりに言葉を交わしたからと言ってすぐに「貢一（こういち）」とも呼び捨てできないし、「雀々さん」もおかしいし、「雀々」と呼び捨てもできないので、「あなた。あなた」と言っていたが、今は小さい時に呼んでいたように「貢一」と呼べるようになった。

自分にとっては一人息子であり大切な子供。一人目は流産し、二人目が死産で、三人目にして産んだたった一人の子供を手放すなどとは尋常ではなかったが、私も当時は若く夫の多額の借金に精神的にも追い詰められていた。子供を手放し実家に戻った当初は、近所の年恰好の良く似た子供の姿を見ては泣き、写真を見ては泣いていたけど、親に立替えてもらった元夫の莫大な借金を返済しなくてはと現実と向き合わなくてはならず、当時は目の不自由な人の職業であったマッサージ師を目指して三十代後半だったが泣いている時間がないほど昼は猛勉強し、夜は働いてお金を返して、昭和52年に免許をとってすぐに開業。今のようリラクゼーションと称した店が少なかったので順調に店舗も18店舗に増え、前は借金に追われたのが、一時は国税に追われるほど儲けた時もあった。



先日の大盛況な出版パーティの時に、「オカン、生んでくれてありがとう。そして、育ててくれなくて、ありがとう！」と言われたが、体さえ元気であれば働いて、ピンチをチャンスに変えることができる。夫の借金がもとで離婚し息子を手放すこと

になったが、手に職をつけマッサージ店を経営し、息子も両親との縁は薄かったけれど、周囲の方々の善意のお陰で、息子も逆境に耐えて心身共にまっすぐと元気に育ち落語家になったことをうれしく思っている。もし夫がギャンブルで多額の借金をつくるというピンチがなければ、息子は落語家になっていただろうか。私自身も平凡な主婦としての日々を送っていたかもしれない。息子も私も倒れたものの起き上がるかと必死のPATCHで多くの人に支えられながら生きてきた。特に中学生で一人で生きていかななくてはならなくなった息子のピンチを、さまざまに助けてくださった方々には本当に感謝している。（写真：出版パーティで親子でデュエット）

親子の縁とは不思議で、一度言葉を交わして打ち解けてからは息子や嫁や孫も仲良くしてくれて、我孫子観音の近くに住んでいるので雀々一家が2月3日の節分祭に家にき

て楽しくて過ごすなど、いろんなことがあったが今は幸せやなぁとしみじみと感ずることがある。時々一緒に御飯食べに行ったり、お酒飲みに行ったりするが、「オカン、オカン」と肩を抱いて周りの人たちに気軽に紹介してくれる。また息子がげんき堂の役員になってくれて、いろいろアドバイスをくれたりすると一人で運営していた時よりもやはり心強く感じる。

子供は親を選べないために、息子には多感な頃に他の家にはない苦労をさせてしまった事を悔いているのには変わりはない。元凶の元夫は20年前に亡くなって仏様になっている。死んだ人は良く見えるらしいと思っていたが、最近は気安くなり時々口喧嘩するようになり、この前も口喧嘩した数日後に電話が掛ってきて「ごめんなぁ。言い過ぎた…。やっぱり親やもんなぁ」と言われた。理由はどうあれ手放してしまってもう会えないと思っていた子供の口から親やからといわれると、「親だ」と認めてくれたのだと内心本当に嬉しかった。私も離婚後に独身を通し雀々の母として恥ずかしくないようにと気を張っていたから人一倍頑張って働き続けることができたのだと思う。

「必死のPATCHで生きてさえいれば、倒れても起きられる」と息子の本にあるが、ピンチをチャンスに変えることができるように、人生にはいろいろ苦しい事もあるが笑い飛ばし必死に生きる前向きさが大切だと思う。

今回息子が出版した「必死のPATCH」が好評だったので、秋に枝雀師匠に入門後について描いた続編の本がでたらドラマになることが決まり、藤山直美さんが母親役、私の役になってくれるそうで、楽しみにしている。ぜひ秋に出る続編も買ってやってください。

後半は、「元気堂」で培ったセルフマッサージのポイントや、特に顔ツボを中心に紹介。参加者も見よう見まねでツボを押してリフレッシュ。オカンこと、菊本政子さんを囲んで記念写真を撮ってお開きとなった。

参加者：塾生：秋山建人・池崎宗男・井上章・大森史子・鎌田令子・北原祥三・北村千代江・木村正治・後藤由利子・下野譲・田中稔三・谷福江・中村孝夫・浜田真弓・原田彰子・平野康子・宮本雅彦・宮本麗子・森川千代子
一般：菊池まどか・清原風早子・国末公英・辻本建治・田浦ちづこ・中島園・彦坂真一郎・安田行秀・森川惣吾・吉村直樹（アイウエ順・敬称略）
S

5月号の「婦人公論」に桂雀々師匠と菊本政子さんの対談記事が掲載予定。

